

Title	シュタイナハ手術の影：イェイツとノーマン・ヘア
Sub Title	The Steinach operation's shadow : Yeats and Norman Haire
Author	萩原, 眞一(Hagiwara, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.40 (2002. 3) ,p.1- 15
Abstract	<p>The purpose of this paper is to demonstrate that Yeats's involvement with the Steinach Operation which Norman Haire performed on him in April 1934 places him on the fringes of the world of eugenics. The paper first refers to sexologist Norman Haire. The field of sexology whose interest lay in achieving a scientific understanding of sex was founded in the early years of the twentieth century and quickly developed into an academic endeavor. Haire, aiming at the health and happiness of society, threw himself vigorously into the movement of sex education and birth control and was also attracted by the possibilities of rejuvenation. Secondly, the paper examines Yeats's experience with the Steinach Operation. Steinach was a celebrated professor of biology at the University of Vienna. After having investigated the physiology of the gonads, he came to the ultimate conclusion that hormonal action of the gonads was the crucial factor in determining sexual function. Additional experiments led him to deduce that the ligation of the vas deferens would have a rejuvenating effect. It is important to bear in mind that the Steinach Operation was simply a vasectomy resulting in sterilization. Thirdly, particular attention is paid to Yeats's implication in eugenics. Yeats joined the Eugenics Society in November 1936 probably through the influence of Haire but soon resigned from the Society. Raymond Cattell who took an extreme view of hereditary inheritance and approved of sterilization made a significant contribution to Yeats's thought at this time. It would be no wonder that Yeats looked "distinctly out of place" (Bradshaw) in the Society advocating environment-oriented eugenics. Finally, the paper concludes that Yeats's involvement with the Steinach Operation in 1934, the year of the enforcement of the Nazi Sterilization Law, sets him within the broader context of the British eugenics movement and thus has darker undertones.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20020331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュタイナハ手術の影

——イエイツとノーマン・ヘア——

萩原真一

はじめに

イエイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) は、1930年代初頭、深刻な芸術的危機に直面する。その最大の原因は、老齢による肉体的な衰え、とりわけ性的能力の低下と、それに伴う創作意欲の減退であった。詩人が陥った危機の有り様は、たとえば、1932年6月9日付の手紙の一節を読むと、窺い知ることができる——「私の想像力は停止し、躍動する兆候を見せません」“my imagination stopped and has showed no sign of moving”。¹ リチャード・エルマンが指摘するように、イエイツにおいて「詩作」“versemaking”と「性愛」“lovemaking”が密接不可分な関係にあることから、性的能力の衰退は詩的想像力の枯渇に直結したのである。²

心身共に衰えきった「自己を改造しなければならない」“Myself must I remake”³ と見定めて敢行されたのが、シュタイナハ手術なる回春手術であった。イエイツとシュタイナハ手術については、すでに詳細な研究があるが、それによると、手術の治療効果はあくまでも「心因性」“psychogenic”のものでしかなく、身体的レベルでは「ほとんど確実に無視しうる」“almost surely negligible”ものであった、と推断されている。⁴ この推断の当否はともかく、シュタイナハ手術を契機に意気消沈していた詩人が「別人」“another man”⁵ に変貌し、新たに旺盛活発な創作活動を展開し始めたことは、紛れもない事実であった。

そこで注目したいのは、イエイツにシュタイナハ手術を施したノーマ

ン・ヘア (Norman Haire, 1892-1952) なる医師である。ノーマン・ヘアといっても、現在では医学史や文化史の片隅に名前を留めているだけで、いわば忘れ去られた存在だ。イエイツ研究においてもシュタイナハ手術の執刀者として言及されるだけで、これまでほとんど論じられることがなかったといってもよいであろう。しかし、詩人の芸術的再生に一役買ったこの人物に好奇心を引き寄せられ、少し詳しく資料に当たってみると、彼が19世紀末から20世紀前半にかけて隆盛した優生学の運動に深く関与し、社会的な不適者に断種手術を実施していたことがわかってくる。彼は当時、優生学の最も熱心な主唱者の1人として知られており、同時代の英国文化について語るとき、その果たした役割を軽々に無視することはできないのである。優生学といえば、晩年のイエイツ自身、その言説に思想的あるいは心情的に傾斜していたことが、デイヴィッド・ブラッドショーをはじめとする研究者たちによって明らかにされつつあることは、周知の通りだ。

とすると、一見単なる患者と医者との偶然的な出会いにすぎないと思われたイエイツとノーマン・ヘアの関係が、何やら意味深長な様相を呈してくるのではなからうか。確かに表面を探るかぎり何の共通点ももっていないので、2人を並べてみるというのは意味のないことのように見えるかもしれない。しかし、彼らを優生学という当時の支配的なパラダイムの中に置き直してみると、本人たちが意識していたか否かにかかわらず、両者の間に濃厚な共通項が浮上してくることも事実なのである。

拙論では、ノーマン・ヘアがイエイツとの関係で有した役割を、①シュタイナハ手術の執刀者、②詩人晩年の重要な女友達の1人、小説家エセル・マニン (Ethel Mannin, 1900-1984) の紹介者、③英国優生学協会への媒介者、という3つの観点から検討し、さらにシュタイナハ手術のはらむ暗い負の側面を確認した上で、イエイツが優生学という当時の大きな思想の枠組みとの間で切り結んでいた関係の一断面に、光を照射することを目的とする。

1. ノーマン・ヘア

それでは、ノーマン・ヘアとはいかなる人物であったのかを知るため、手始めに略歴の一端を瞥見してみよう。⁶

ノーマン・ヘアは、1892年、シドニーで誕生する。シドニー大学大学院で医学修士の学位を取得後、第1次大戦中はオーストラリア軍の軍医として従軍。1919年、渡英し、性教育と産児制限運動に精力的に従事する。21年、英国初の福祉センターを設立し、アムステルダムで開かれた産児制限会議に英国代表として出席。22年、ロンドンで開かれた第5回国際産児制限会議の避妊部会の座長を務める。24年、後にイェイツを鼓舞することになる著作『回春』*Rejuvenation* を出版。25年、アメリカとカナダを講演旅行し、ニューヨークで開かれた第6回国際産児制限会議に英国代表として出席する。26年、ベルリンで開かれた第1回性改革世界同盟国際会議 International Congress of the World League for Sexual Reform に参加。29年、ロンドンで開かれた第3回性改革世界同盟国際会議の議長。34年、『性知識百科事典』*Encyclopaedia of Sexual Knowledge* の編集主幹を務める。

こうして前半生の略歴を駆け足で通観してみると、ノーマン・ヘアがいわゆる性科学 *sexology* と呼ばれる分野で積極的に活動した人物であることがわかってくる。

性科学は、性に関わる事象を学際的に研究することを目指し、20世紀初頭に成立した学問である。性科学の趣旨については、第3回性改革世界同盟国際会議の議長を務めたノーマン・ヘア自らが、歓迎の挨拶の中で次のように簡潔に述べているので、引用してみよう。

The orthodox code has been formulated largely by professional theologians who are concerned more with the future life than with our life here on earth. We feel that the time has come when we

must revise our sex standards in the light of present-day science and ethics, and reformulate them so that they may be adapted for people who are aiming at the health and happiness of themselves and of society in general....Most of them [the individual points] deal with the betterment of marriage and divorce, the position of the mother and child, and with *the improvement of the race* (my emphasis).⁷

「性の規範」を雁字搦めに縛ってきた「神学者」編纂の「正統的な法典」を廃棄し、代りに「科学」に依拠した新しい性倫理を確立し、社会の「健康と幸福」を目指すこと——これが性科学の主な目的であった。19世紀のヴィクトリア時代、性と結婚の調和を説く制度が厳然と存在していたけれども、世紀を越え、反ヴィクトリアニズムの機運が高まると共に、性と結婚は調和しえない、いやむしろ対立するものであると公然と叫ばれるようになり、性と結婚とモラルの相互関係性が強力な磁場を形成するようになったが、この強力な磁場に対する1つの反応として成立したのが性科学であったのだ。⁸

ここで特に留意しなければならないのは、「人種改良」という文言である。「人種改良」を企てるからには、当然、人種の退化意識が蔓延していたはずだ。実際、大英帝国が衰退し始めた19世紀末以降、英国人の多くは自国が腐敗しつつあるのではないかと感じていた。さらに、大都市のスラム街に住む下層階級の出生率が中流以上の階級の出生率を上回っていたことが、人種の退化意識にいつそう拍車をかけていた。そこで、「人種改良」を図るための理論的根拠として提唱されたのが、優生学である。提唱者はチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-1882) の従弟フランシス・ゴルトン (Francis Galton, 1822-1911) で、1883年のことであった。この優生学は、20世紀になってから大々的な活動を開始する。⁹

社会ダーウィン主義の適者生存を原理とする優生学は、通常、2つに大

別される。一方は適者の人為的な保存・増加を重視する正の優生学 positive eugenics であり、他方は不適者の排除・抹殺を重視する負の優生学 negative eugenics である。「古風なりベラルで人類平等主義の敵対者」“an old-fashioned Liberal...an opponent of egalitarianism”¹⁰ を自認するノーマン・ヘアは、「これ以上人種を汚染しないよう、社会は諸君 [社会的な不適者] に強制的に断種手術を受けさせる」“society compels you to submit to sterilization, so that you may no longer contaminate the race”¹¹ と言明しながら、負の優生学を支持し、それを実行に移したのである。

以上のことから、ノーマン・ヘアが20世紀前半に発達した性科学の分野で活躍し、片や社会の「健康と幸福」を実現する一環として回春手術を試み、片や「人種改良」の一環として断種手術を施した医師であることを、確認できたはずだ。同一人物が回春手術と断種手術を手がけることは、奇異に感じられたかもしれないが、双方とも性科学に包摂される重要な医療技術であることを理解すると、それが少しも奇異なことではないと得心できるのではなからうか。いや、そもそも回春手術と断種手術は、ほんの紙一重の違いはあるものの、本来、技術的には同一なのであった。

2. シュタイナハ手術

イエイツがシュタイナハ手術を受けたのは、1934年4月初旬のことである。それより少し前、ダブリン滞在中の詩人は或る友人宅を訪問していた。その時の模様をジョゼフ・ホーンは次のように記している。

He [Yeats] called upon a friend in a dejected mood, seeming very much out-of-sorts and saying that he had no wish for prolonged life unless he could re-create himself continually...and this friend described the contents of *Steinach's book* with great impressiveness and the appropriate gesticulations. He hurried away to read the

volume in the Trinity College Library. Then after consultation with a doctor..., he made his own decision and went to London to undergo the operation. His friend had merely thought to entertain him with the account of a novelty and was astonished when, a month or two later, he strode into his office looking like another man and said, 'I had it done' (my emphasis).¹²

イエイツは友人に老いの悩みを打ち明け、「自己を再創造」しないかぎり、これから生きる意欲が湧かないと沈鬱な面持ちで告白する。告白を聞いた友人が、冗談半分にシュタイナハ手術を扱った本について話すと、詩人は俄然、興味を掻き立てられ、すぐにトリニティ・カレッジ図書館に向き、現物に目を通したという。

この本こそ、ノーマン・ヘアが1924年に出版した啓蒙書『回春』であった。そこには、彼がシュタイナハ手術を施した25人の患者の記録の他に、別の医師たちによるシュタイナハ手術の記録も数多く報告されていた。中には好結果を示す記録も少なくなかった。¹³ 本を一読、イエイツが過大な夢に胸をふくらませたとしても不思議ではない。詩人はすぐさまロンドンに向かい、ノーマン・ヘアの手術を受け、後日、「別人」のごとく友人の事務所に姿を現したという次第だ。

そもそもシュタイナハ手術は、2本の精管のうち片方あるいは双方を縛るだけの、いたって単純な手術である。この手術に理論的な裏づけを与えたオイゲン・シュタイナハ (Eugen Steinach, 1861-1944) は、ウィーン大学教授で内分泌学の権威であった。性ホルモンがあらゆる生物の発達と行動を決定する重要な因子であることを発見した彼は、インポテンツを治療するためには男性ホルモンを補給すればよいという仮説を立てた。そして、精管を縛ることで鬱血が生じ、その鬱血で男性ホルモンの排出量が増大することを、動物実験で立証したのである。シュタイナハ手術は、1918年11月、初めて人間に応用されたのち、20年代のウィーンにおいて広く行われ

た。だが、精管を縛るということは、すでに断種目的で行われていたので、シュタイナハ手術は技術的には何ら目新しいものではなかった。違いといえば、シュタイナハ手術の場合、通常1本の精管だけを縛ったことくらいである。

Technically, the Steinach operation was a vasectomy....It should be noted that, unlike a bilateral vasectomy performed to bring about sterilization, the Steinach operation did not necessarily sterilize the patient because sometimes only one vas was ligated...he [Steinach] proposed unilateral ligation in the trials on human beings.¹⁴

さてノーマン・ヘアは、イエイツの術後の状況を検査するため、或る若い女性を詩人に紹介した。その女性とは、小説家・ジャーナリストのエセル・マニンである。彼女は、マーゴット・ラドック (Margot Ruddock) やドロシー・ウェルズリー (Dorothy Wellesley) と共に晩年のイエイツを彩る重要な存在になった。手術から1年半後の、1935年12月19日付のマニン宛の詩人の手紙を読むと、患者イエイツ—医師ヘア—検査官マニンの、何やら曰くありげな三者関係が髣髴としてくる——「貴女に手紙を書いたから数週間後、仕事はいたって順調、大いに楽しんでます。ヘアが診察したところ、体調は万全でした」“A few weeks after I wrote to you I became well enough for work and pleasure. Haire examined me...and approved my state.”¹⁵ 後年、エセル・マニンはイエイツについて回想しているが、次の一節は2人がかなり深い関係にあったことを物語っている——「彼にはウィットのきらめきと下卑たユーモアの感覚がありました。3年間、私は彼と親密に交際しました」“He had flashes of wit and a *bawdy* sense of humour. For three years I knew him *intimately*.” (Mannin’s emphases).¹⁶ このように手術後のイエイツと「親密に交際」

していたマニンだけに、彼女がシュタイナハ手術の無効性を証言したとなると、その信憑性はきわめて高いといわざるを得ないであろう。¹⁷

3. イェイツと優生学

ノーマン・ヘアが果たした役割としてもう1つ言及する必要があるのは、イェイツが1936年11月2日に優生学協会へ入会するに際し、発揮したかもしれない影響力である。ブラッドショーに従えば、詩人が独自に入会した可能性が最も高いのであるが、入会以前に影響を受けた人物がいるとすれば、その内の1人として優生学協会のフェローであったノーマン・ヘアを挙げるができるという。

If Yeats was drawn to the Eugenics Society through the influence of specific individuals, he was acquainted with at least two people from whom he could have learned of its aims and activities. Norman Haire was a Fellow of the Eugenics Society from 1921 until 1934, the year in which he performed Yeats's Steinach operation and resigned from the Society over what he took to be its position with regard to voluntary sterilisation.¹⁸

当のノーマン・ヘアは1934年に優生学協会を脱会している。前述したように、彼は社会的な不適者の排除を目指す負の優生学を支持し、「人種の汚染」を阻止するため断種手術を実施していたが、それに対し、優生学協会副会長の生物学者ジュリアン・ハックスリー (Julian Huxley, 1887-1975) などは、知的・肉体的な差はあくまでも環境的な要因に由来するものであり、遺伝的な要因によって決定されるものではないと主張し、断種手術を批判していた。ノーマン・ヘアの脱会の背景には、断種手術をめぐる優生学協会幹部との見解の相違があったようだ。

ノーマン・ヘアと入れ違いに優生学協会に入会したイェイツが、穏健的

な協会の中で「明らかに場違い」“distinctly out of place”¹⁹の感を抱いたとしても不思議ではないであろう。詩人は、最晩年の随想集『汽罐の上で』*On the Boiler* (1939) に収められた断章「明日の革命」“Tomorrow’s Revolution”において、「われわれの世代は汚染されている」“our generation is corrupt”あるいは「ヨーロッパ主要国は心身両面で墮落しつつある」“the principal European nations are degenerating in body and in mind”²⁰という認識を示して、同時代の社会状況への危惧の念を表明する一方、こうした人種の「汚染」や「退化」を阻止する手段として、断種手術を積極的に肯定する激烈な一節を『汽罐の上で』の草稿中に残しているからである。

...it may come by war & followed by various measures, such as sterilization of the unfit to control the spawn what stupidity survives?²¹

イエイツが「明日の革命」を執筆する上で典拠にしたのは、優生学協会会員で心理学者のレイモンド・キャッテル (Raymond Cattell) の著作『我が国民的知性のための闘争』*The Fight for Our National Intelligence* (1937) であった。キャッテルは、自ら実施した知能テストの結果を踏まえ、知性の衰退が進行中であり、それが遺伝的な要因に根差していると結論づけ、この知性の衰退を根本的に阻止するためには、断種手術を行うべきだと強く主張していたのである。²² この過激な遺伝決定論者キャッテルに同調したイエイツが、ノーマン・ヘア同様、優生学協会の穏健路線に物足りなさを感じたとしても、むべなるかなであろう。

ところで、『汽罐の上で』の草稿にある「蛙の卵」のイメージからすぐに想起するのは、詩「自我と魂の対話」“A Dialogue of Self and Soul” (1928) の第2部にあらわれる「盲人の下水の蛙の卵」“the frog-spawn of a blind man’s ditch” (p. 236) である。一見汚なくて醜悪であるけれど

も、旺盛な繁殖力を秘めたこの「蛙の卵」のイメージは、「自我」が執着しようとしている現世を鮮烈に表象するのに功を奏しているといえよう。それに対し、『汽罐の上で』の草稿中の「蛙の卵」のイメージは、ネガティブなニュアンスが強く、蛙が卵からうようよ繁殖してくるように、社会的な不適者が次から次へとびこる印象を与える。ここからは「卑しいベッドで生まれた卑しい産物」“Base-born products of base beds” (p. 327) の増殖に苛立ち、それを阻止するためには断種手術を断行すべし、と声高に叫ぶ切迫した詩人の気分が窺われるように思われてならない。そんなイェイツであったから、ジョゼフ・ホーンによると、強制断種法がナチス・ドイツにおいて1934年1月（奇しくも詩人がシュタイナハ手術を受けた年）から実施されたという報に接すると、「大満足」したのではなかろうか。

He [Yeats] had read a great number of popular books on Hitler's Germany, and someone told him—he repeated it with great satisfaction—that there was ‘a new law in that country whereby ancient and impoverished families can recover their hereditary properties’.²³

おわりに

以上の議論から、2つの点を確認することができる。1つは、イェイツとノーマン・ヘアとの間に存在する濃厚な共通項とは何かという点だ。それは、すでに明らかなように、人種の退化から人種の再生への情熱と、その変革を実現する一手段としての社会的な不適者に対する断種手術の積極的な肯定である。もう1つ確認できることは、断種手術と回春手術が、目的こそ違え、技術的には同じであるという点だ。双方とも社会の「健康と幸福」を追求する性科学に包摂される医療技術である以上、しばしば同一の性科学者によって手がけられたのである。

こうした点を念頭に置きながら、イエイツのシュタイナハ手術体験を再検討してみると、次のようなことが判明するのではなからうか。第1に、シュタイナハ手術が、晩年の詩人に豊饒多産な創造活動をもたらすきっかけになったという意味では、確かに輝かしい正の側面をもっているのだが、しかし技術的には断種手術と同じであったという意味では、暗い負の側面を秘めていたことである。第2に、もともとイエイツは思想的・心情的に優生学に傾斜していたが、²⁴ シュタイナハ手術が正負の二面性を併せ持っていた以上、詩人が手術を受けたこと自体によって、必然的に優生学という当時の大きな思想のパラダイムとの間に一定の関係を切り結んでしまったことである。²⁵

ここですぐに付言しておかなければならないのは、20世紀前半に優生学に汚染される現象が、イエイツのようないわゆる右寄りと目される「反動家」だけではなく、バーナード・ショー (Bernard Shaw, 1856-1950)、H. G. ウェルズ (H. G. Wells, 1866-1946)、ハヴロック・エリス (Havelock Ellis, 1859-1939) といった左翼勢力に加担する人たちにおいても顕著に見られたことである。²⁶ 人種の退化から人種の再生への叫び声は、この時期、政治的な信条の別なく、発せられたのだ。

それにしても、ノーマン・ヘアの本を読んだイエイツは、回春目的でシュタイナハ手術を受けたとき、当然、それが技術的に断種手術と同じであることを承知していたはずである。だとすれば、社会的な不適者に対する断種手術を主張した自分自身が、まかりまちがえて断種の憂き目に遭い、子孫をさらに増やすことができなくなってしまうのではないかと危惧することはなかったであろうか。もちろん、イエイツは手術当時すでに一男一女をもうけていたのであるから、よもやそんなことはあるまい。しかし、先祖代々受け継がれてきた高貴で純粋な血統＝「いかなる行商人の^{イチモツ}一物をも通過してこなかった血統」「blood / That has not passed through any huckster's loin” (p. 101) を、恋人モード・ゴン (Maud Gonne) に対する「不毛な恋情ゆえ」「a barren passion's sake” (p. 101) に断絶させて

しまうことを、独身の詩人が何よりも懸念していたことを思い起こしてみるとき、先程の設問を的外れの愚問として一蹴することもできないのではなかろうか。

付記：本稿は、日本イェイツ協会第36回大会（2000年11月4日）における研究発表に際して用意した原稿に加筆修正を施したものである。

注

1. *The Letters of W. B. Yeats*, ed., Allan Wade (1955; rpt. New York: Octagon Books, 1980), p. 797.
2. Richard Ellmann, *Four Dubliners: Wilde, Yeats, Joyce, and Beckett* (New York: George Braziller, 1987), p. 40.
3. Richard J. Finneran, ed., *The Collected Poems of W. B. Yeats*, 2nd ed. (1983; rpt. London: Longman, 1989), p. 301. 以下、イェイツ詩からの引用は本書により、本文中の括弧内に頁数を記す。
4. Virginia D. Pruitt and Raymond D. Pruitt, "Yeats and the Steinach Operation: A Further Analysis," in Richard J. Finneran, ed., *Yeats: An Annual of Critical and Textual Studies Vol. I* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1983), p. 122, hereafter cited as Virginia & Raymond.
5. Joseph Hone, *W. B. Yeats: 1865-1939* (London: Macmillan, 1942), p. 437.
6. Based on Frank C. Roberts, comp., *Obituaries from the Times: 1951-1960* (Reading, England: Newspaper Archive Developments, 1979), pp. 322-323.
7. Norman Haire, ed., *World League for Sexual Reform: Proceedings of the Third Congress* (Hertford: Stephen Austin and Sons, 1930), p. xviii.
8. A. C. Ward, *The Nineteen-Twenties, Literature and Ideas in Post-war Decade* (London: Methuen, 1930), p. 202を参照。
9. 優生学の歴史に関しては、Daniel J. Kevles, *In the Name of Eugenics:*

Genetics and the Uses of Human Heredity (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1985) [ダニエル・ケウルス『優生学の名のもとに——「人種改良」の悪夢の百年』(西俣総平訳, 朝日新聞社, 1993)] に負っている。

10. Quoted from Jeffrey Weeks, *Sex, Politics and Society: The Regulation of Sexuality since 1800*, 2nd ed. (1981; rpt. London: Longman, 1989), p. 185.
11. Norman Haire, "Contraceptive Technique: A Consideration of 1,400 Cases," *The Practitioner*, 111 (1923), 88.
12. Joseph Hone, pp. 436-437.
13. Norman Haire, *Rejuvenation: The Works of Steinach, Voronoff, and Others* (London: George Allen & Unwin, 1924), pp. 62-135.
14. Virginia & Raymond, p. 112. なお, シュタイナハおよび彼の研究については, Harry Benjamin, "Eugen Steinach, 1861-1944: A Life of Research," *Scientific Monthly*, 61 (1945), 427-442; Virginia & Raymond, pp. 104-124などに負っている。
15. *The Letters of W. B. Yeats*, pp. 844-845.
16. Robert Huxter, *Reg and Ethel: Reginald Reynolds, His Life and Work and His Marriage to Ethel Mannin* (York: Sessions Book Trust, 1992), p. 100.
17. Ellmann, p. 40. のいう「女友達」はエセル・マニンを指すと推定される。——「イエイツの女友達が確認したことをノーマン・ヘアが(中略)わたし[エルマン]に語ってくれたのだが, それによると, 手術は詩人の性的能力に全く影響がなかったということだ」"Norman Haire...said to me what a woman friend of Yeats's confirmed...that the operation had no effect upon his sexual competence."
18. David Bradshaw, "The Eugenics Movement in the 1930s and the Emergence of *On the Boiler*," in Richard J. Finneran, ed., *Yeats Annual No. 9* (London: Macmillan, 1992), p. 192. また, Donald J. Childs, *Modernism and Eugenics: Woolf, Eliot, Yeats, and the Culture of Degeneration* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001), p. 156は, 「ヘアの存在

はとりわけ興味深い」“The case of Haire is particularly interesting”と述べ、回春手術と断種手術の双方を手がけたヘアがイエイツとの関係において有した役割を強調している。

19. Bradshaw, p. 192.
20. W. B. Yeats, *Explorations* (London: Macmillan, 1962), p. 420.
21. Quoted from Bradshaw, p. 207.
22. キャッテルの遺伝決定論に関しては、ブラッドショーの研究に負っている。
23. Hone, p. 467.
24. Bradshaw, pp. 199-200. なお Childs, p. 155は、「イエイツの優生学への関心ははるかに長い歴史を伴っており、それはかなり早い時期から始まっている」“Yeats’s interest in eugenics involves a much longer history, and dates from a much earlier time”と指摘し、優生学に対する関心の始まりが20世紀初頭にまで溯ることができると推定している。
25. Tim Armstrong, *Modernism, Technology, and the Body: A Cultural Study* (Cambridge; Cambridge University Press, 1998), pp. 133-158は、シュタイナハとその信奉者たちが、ジェンダー／セクシュアリティ／生殖のコントロールを目指し、優生学の影を引きずっていたことを指摘している。
26. Daniel Paul, “Eugenics and the Left,” *Journal of the History of Ideas*, 45 (October 1984), 567-590を参照。

Synopsis

The Steinach Operation's Shadow : Yeats and Norman Haire

Shinichi Hagiwara

The purpose of this paper is to demonstrate that Yeats's involvement with the Steinach Operation which Norman Haire performed on him in April 1934 places him on the fringes of the world of eugenics.

The paper first refers to sexologist Norman Haire. The field of sexology whose interest lay in achieving a scientific understanding of sex was founded in the early years of the twentieth century and quickly developed into an academic endeavor. Haire, aiming at the health and happiness of society, threw himself vigorously into the movement of sex education and birth control and was also attracted by the possibilities of rejuvenation.

Secondly, the paper examines Yeats's experience with the Steinach Operation. Steinach was a celebrated professor of biology at the University of Vienna. After having investigated the physiology of the gonads, he came to the ultimate conclusion that hormonal action of the gonads was the crucial factor in determining sexual function. Additional experiments led him to deduce that the ligation of the vas deferens would have a rejuvenating effect. It is important to bear in

mind that the Steinach Operation was simply a vasectomy resulting in sterilization.

Thirdly, particular attention is paid to Yeats's implication in eugenics. Yeats joined the Eugenics Society in November 1936 probably through the influence of Haire but soon resigned from the Society. Raymond Cattell who took an extreme view of hereditary inheritance and approved of sterilization made a significant contribution to Yeats's thought at this time. It would be no wonder that Yeats looked "distinctly out of place" (Bradshaw) in the Society advocating environment-oriented eugenics.

Finally, the paper concludes that Yeats's involvement with the Steinach Operation in 1934, the year of the enforcement of the Nazi Sterilization Law, sets him within the broader context of the British eugenics movement and thus has darker undertones.